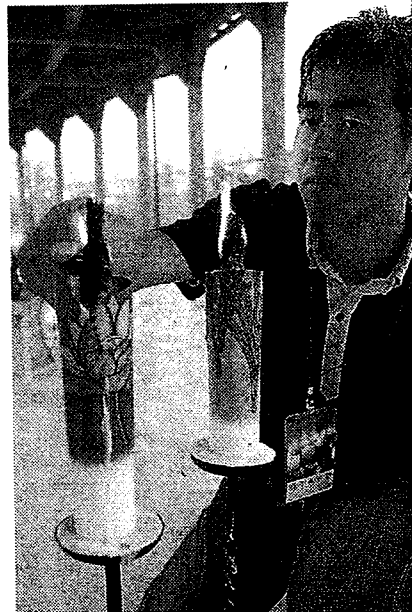


和ろうそくで 未来照らそう

地球環境に思いをはせ、明るい未来を願って、街中で一斉にろうそくをともす「キャンドルナイト」が夏至の21日、全国各地で催される。富山県内では、百年の歴史をもつ和ろうそく店が、子どもたちにろうそくへの絵付けを指導。幻想的でスローな夜の演出に二役を買っている。



絵付けされた和ろうそく＝20日、富山市の富岩運河環水公園

キャンドルナイト協力

百年の店 絵付け指導

キャンドルナイトは、夏至の午後8時から2時間、全国各地で一斉に電灯を消し、キャンドルに火をともして過ごすというイベント。闇の中で、エネルギー問題などを考えてみようとの趣旨で、近年は夏至の日だけでなく、6、7月中旬に全国各地で同様のイベントが開かれている。

富山市の富岩運河環水公園では20日、子どもたちが和ろうそくに絵付けをする催しがあった。花や動物など、それぞれが好きな絵柄を思い思いに描き、世界で一つのろうそくをつくった。

和ろうそくを提供し、絵付け指導をしたのは、同市中野新町の松住燭燭店。中心部に糸の芯が通った棒形の西洋ろ

うそくに對し、和ろうそくはいくさの芯などを巻き付けた芯棒に溶かしたろうを何層にも塗る。先端に向かって太くなる形が特徴で、断面には年輪ができる。大量生産できる西洋ろうそくと違い、熟練の技が必要で、和ろうそくの作りを続ける店は、市内でも珍しいという。

1910年の創業。45年8月の大空襲では工場と店舗が焼失したが再建し、3代目の松住利春さん(74)が伝統を守ってきた。

絵付けは、4代目の英樹さん(45)が10年ほど前に始めた。冬場に生花が乏しくなる東北地方で、供花の変わりにろうそくに花の絵を描いたのが始まりとされる。英樹さん

が、近くの寺院から要望を受けて花の絵付けをしている間に評判を呼び、4年ほど前から体験教室を開くようになった。市街地の活性化を考えるNPO法人「富山観光創造会議」の誘いで今回のキャンドルナイトの催しに協力した。

松住利春さんは「和ろうそくと触れあうことで物作りの歴史を知り、子どもたちが、郷土の未来を考える契機なればよい」と話していた。

絵付け体験の後には、約300個のろうそくに火をともし、夜の暗闇に幻想的な空間を浮かび上がらせる予定だったが、この日は雨により中止になった。

キャンドルナイトの催しは今後、本格化。同市絵曲輪3丁目のグラウンドプラザでは21日に3000〜4000個のキャンドルに火をともす。富山市庁舎など236施設では、夜間の照明を消すライトダウンがある。